



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 世田谷美術館

「結局、私たちはこの“芸術と素朴”と名づけた展覧会を通じて、何をうったえようとしているのだろうか。…人間がどこかで本来一体だった筈の“技術”と“芸術”とを、別々に分離して考え始めたあたりに問題があるのでなかろうか、と思ったりしている。…遠ざかりすぎて、こんどはそのことに危惧を感じ出した。技術と芸術とが一体化している“素朴な”人間の営みに、あらためて“自然”を見たのである。…人類のたどった長い道程が、どうやらそのことを物語っているように、私たちは、“素朴”から出て、再び“素朴”に回帰しつつある、ということのようだ。その“素朴”を“自然”といいかえても一向にさしつかえない。…個人の一生を通じても、私たちは“自然”から出て、“自然”に帰り得たとき、それが究極の境地だとうのである。こうして私たちのこの企画展は、厳密にいふと、人間の営為のすべてにかかわってしまう。」（大島清次（1986）「芸術と素朴」『世田谷美術館開館記念展図録』より）

## ■日本の美術館を取り巻く環境<sup>1</sup> ■

15

### 近代美術館の誕生

1789年に始まったフランス革命によって、王侯貴族が独占していた美術品コレクションや教会のコレクションが没収され、1791年に開催された国民公会は、それらのコレクションをルーブル宮殿のグランド・ギャラリーで一般公開することを決定し、1793年に「共和国美術館（ルーブル美術館の前身）」が誕生した。これが、近代的な公共美術館の起源とみなされている。

アメリカでは、1870年、メトロポリタン美術館が創設される。ヨーロッパと異なり、基金も建物もコレクションもゼロであったため、まず最初に、募金が行われたが、その募金には、上流階級の名士による大口の寄付だけでなく、一般市民も協力したという。当時、ヨーロッパで

25

<sup>1</sup> 本節の記述は、以下の文献に依拠している。石森秀三（1999）『博物館概論』放送大学教育振興会、磯洋介（1996）「公立美術館が多すぎる 器は立派でも中身がない悲喜劇」『アエラ』1996年8月5日、井出洋一郎「平成10年度全国美術館会議第14回学芸員研修会「学芸員の認定と養成の現状について」（東京都現代美術館講堂、<http://www.nc.jp/asahi/art.barbizon/y.ide/8museology.p.01.html>）、大島清次（1994）『内部から見た日本の公立美術館—その問題点と改善私案』、並木誠士、吉中充代、米屋優編（1998）『現代美術館学』昭和堂、樋口秀雄、椎名仙卓（1972）『百年前の東京国立博物館』『芸術新潮』pp.116-121、山本武利、西沢保編（1999）『百貨店の文化史』世界思想社

30

本ケースは、慶應義塾大学平成11年度大型研究助成プロジェクトの一環で、教材として作成されたものであり、特定の経営状況の巧拙を論じるものではない。ケース作成は、和田充夫（慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授）監修の下、川又啓子（慶應義塾大学文学部）と加藤雅代（社団法人日本芸能実演家団体協議会）が行った。（2000年10月作成）